マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦没者遺族会）
郵便番号 154
世田谷区野沢3—11—3
電話 東京（421）3614
振替口座東京93487番
編集兼発行人　浮田信家

拝　啓

新緑の候遺族会の方々には、お元気にお過しのことと存じます。

戦後二十七年漸くマーシャル方面遺族会の事を知り、取急ぎペンを取りました次第です。私は昭和十七年九月経理学校普通科を卒業と共にクェゼリン島第六通信隊附を命ぜられ、同十八年十二月中旬まで六通の庶務及び給与を担当致して居りました者です。

本日環礁一〇、一四、一五号を借りて拝見致し何かとお役に立つ事が有ればと認めました。

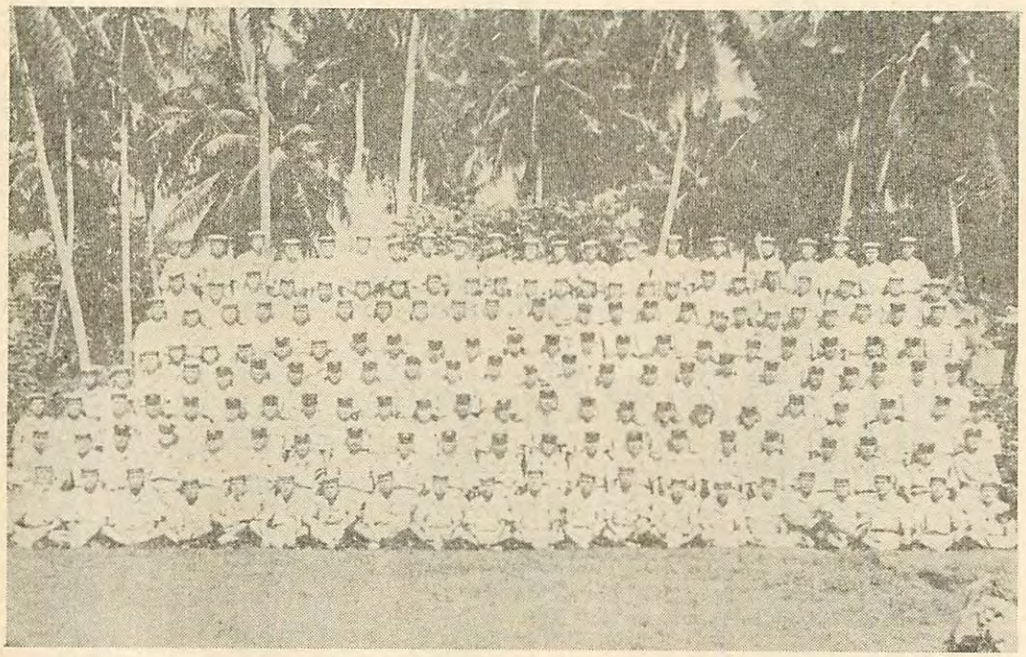
同封の写真は確か昭和十八年十一月三日明治節の折であったと思いますが、六通（ウ九〇ウ一九）の大体全員の写真です。どなたか持って帰って居られると思いますが念の為お送り致します。必要でしたらネガもお送り致します。

環礁を拝見するにつれ、当時が眼の当り、想い出され、改めてこの写真に見入り、お一人お一人の御冥福を心からお祈り致しました。

敬具

佐賀県唐津市
馬場（旧姓若松）直人

玉砕三ヶ月前海軍第六通信隊の半舷員



目次

巻頭の言葉……馬場　直人(1)
名もなき民のこころ…木下道雄(2)
祝沖縄本土復帰……(2)
マーシャル戦記（その二）
……木ノ下　甫(3)
石橋湛山夫人のご逝去を悔んで
秋田　小室舜司郎(4)
マーシャル方面遺骨収集報告
厚生事務官　千葉　秀夫(4)
会員だより……高林　セキ(6)
玉砕二十年後のタラワ環礁
……長谷川　敏(7)
今年の直会旅行記　小室舜司郎(9)
マキン島知事からの航空便……(10)
徳原徳子様の近況だより……(10)
二月六日の慰霊祭
定期総会・直会旅行報告……(10)
第八期決算報告と第九期予算……(11)
副碑製作につき
銘石送付のお願い……(12)
寄附者芳名……(13)
明年二月六日の直会旅行予定……(15)
馬場直人様からの第二信……(16)
事務局便り……(16)
役員人事の異動について……(16)
靖国神社みたま祭……(16)
会費納入励行のお願い……(16)
旧軍人・軍属の残務について(16)
旧金鵄勲章一時賜金受給者に(16)
第六通信隊の御遺族各位え……(16)

名もなき民のこころ

皇居勤労奉仕発端の物語（その一）

木下道雄

応仁の乱後、六十年、西歴一五二六年、後柏原天皇の大永六年、遠く東の国から京に上りついた一人の旅びとが、粟田口の高台に佇んで、ありし昔の都の跡を忍びながら、眼前に展開する荒涼たる景色のうちに、皇居を麦畑の中に望見し

京を見渡し侍ば、上下の家、昔の十が一もなし、大裏（皇居）は五月の麦の中、浅猿と申すにも、あまり有べし

と長歎息した日記が残っている。

当時、兵乱次ぎ、国情安定を欠いたため、荒廃した皇居の完成には、その後、更に半世紀、信長の出現を待たなければならなかった。この間、前後を通じて凡そ百年、誰か身を挺して皇居の修理に当ったものがあったであろうか、不幸にして、歴史は、僅かに洛北、八瀬村民の奉仕を伝えるのみである。

終戦直後、東京都荒廃の有様は、まさに応仁乱後の京に比すべきものがあったであろうが、私はこの廃墟のうちから、一つの物語を拾い上げる。ここに決起登場する一群の人物は、東京を隔たる東北百里、片いなかの農村に、日日流汗の年若い人達である。

秩序は乱れ、世を挙げて疲労困窮のさ中に於て、この人達の行動は、彼ら自身としては、名もなき民の、ささやかなわざと謙遜するかも知れないが、私の眼には、これこそ、わが国守る隠れ身の、尊い姿のように映ずるのである。

物語は、終戦の年にさかのぼる。戦敗れて人みな茫然自失、言語や風俗の全くちがう占領軍兵士の威圧下にあって、国民全体として、行動の積極性を頗る欠いておった当時の有様を、読者各位は一応おふくみの上で、これを読んでいただきたい。

当時、皇居周辺の状況は、どんなであったろうか。皇居の御門という御門には、いずこも、ここも占領軍の歩哨が立っている。これは好奇心にかられた無遠慮な外国兵の入門を阻止するための、占領軍総司令部の好意ある意図もおりこまれた処置ではあったろうけれども、事情を知らぬ日本人の眼には、甚だ以て不愉快千万、「日本人近よるべからず」と無言のうちに、威圧を加える態度のように、うつったことも無理からぬことであった。

二重橋前の十万坪の広場は、管理の統制を欠いたため、六十余ケ所の照明灯は一つも残らず破壊され、道路といわず、芝生といわず到るところ踏み荒されて、昔のような清らかなおもかげは求めるべくもない。あまつさえ、占領軍観兵式用の大スタンドが、二重橋の真正面に二ケ所設けられ、時折は分列式などをやっている。

お濠と森に囲まれた皇居は、外観こそは一見昔とかわらぬようであるけれども、一歩、内に踏み入れば、木造の建造物は殆んど焼失し、さしも端正雄大であった宮殿の跡も、礎石、玉石、煉瓦、瓦到るところに散乱し、まことにいたましい有様であった。私は応仁の昔を思い浮かべ、心中まことに暗然たるを禁じ得なかった。

ところが十二月に入って間もないときであったが、皇居の坂下門の門外に、何の前ぶれもなく、突然六十人ばかりの青年の一群が現われた。どこかの駅から下車したまま、まっすぐに来たものらしく、手に手に荷物を携帯している。守門の皇宮警察官を通じて宮内省への申入れは、

私たちは、宮城県栗原郡のものでありますが、二重橋の前の広場に雑草が茂って、たいそう荒れているということを聞きましたので、お掃除や草刈りのお手伝に上京してきました。東京は食糧や燃料が乏しいということを聞いていますので、私たちに必要な数日分は、ちゃんと用意して持ってきていますから、東京の人達にご迷惑をかける心配はありません。どうかお手伝をさせて下さい。

とのことであった。

面会してみると、六十人の人たちは、みな二、三十歳の青年で、うち数名は年も若いモンペ姿の乙女さんたちであったが、食糧、燃料は勿論のこと、みな一挺ずつ草刈鎌を携えている。今しがた外国兵の歩哨の前を通って門のところまで来たのであるけれども、別段怖れた様子もなく、それかといって別に昂然たるところもないが、語る言葉は、一語また一語、進むにつれて真剣味を加えてくる。

われわれの郷里の出身に長谷川峻という人がいる。緒方国務大臣の秘書官をしていた人だから調べて貰えば判る。この人が郷里に帰ってきたとき、皇居の前が、たいへん荒廃していることを嘆いていた。そこで、われわれは集まって相談をした。まことに相すまぬことだ。みんなで行って草刈りや、お掃除のお手伝をして上げようではないか、草刈りは毎日野良でしているのだから、そんなことは何でもない。だが今どき、天子様のために何か働いたら、マッカーサーがわれわれを検挙するかも知れない。万一検挙されるようなことがあったときの用意にと、第二隊は郷里に残してきた。県庁の知事さんにも挨拶して上京すべきであったが、これも後で何かの迷惑がかかっては悪いと思って、だまってこっそり上京してきた。娘っ子のうちには水盃をしてきたものもいる。

と上京の動機や目的について屢々説明するところであった。（未完）

木下道雄先生は東京ご出身

明治45年東大法科ご卒業。岡山県警部、同県和気郡々長を経て大正6年内閣書記官。同13年東宮侍従、昭和2年侍従兼皇后宮事務官、同6年宮内大臣官房総務課長、同8年内匠頭、同11年帝室会計審査局長官、同20年皇后宮大夫兼侍従次長。同21年依願退官。同25年皇居外苑保存協会理事長。今日に至る。6月15日同協会にて環礁の御閲覧を乞い、転載の御承認をお願い致したところ即座に御快諾下さいましたことを申添えます。（浮田）

沖縄の会員みなさまえ

発行時期の関係上お祝言が大変おくれ申わけありませんでした。二十七年ぶりの本土復帰を心から、お祝ひ申し上げます。

昭和四十七年五月十五日

会長　村上義一

外本部役員一同

マーシャル戦記 —その二—

木ノ下　甫

12月8日（月）（昭和16年）日記

「午前三時三十分、我機動部隊の空軍三百数十機は、前夜来海軍慰安の夕にて太平の夢に溺れ居りし米国パールハーバー在泊主力艦隊の頭上に奇襲、一大猛爆と雷撃を敢行。四時前後。敵は狼狽。平文にて電信を乱発。SOSは乱れ飛ぶ。オアフ島全航空基地も亦、我猛鷲の爆撃によりて、これ亦大損害。忽ち西は、英領シンガポールに中攻の猛爆〇五三五（本稿中数字四字の縦書は二十四時間制の時刻を示します）。陸兵の馬来上陸。

〇五〇〇発我千歳空の中攻三六機はウェーキ島を空襲（地上八機撃破）無事帰る。ガム島四周より爆撃攻撃を受くと、悲鳴をあげ、又フィリッピンを空襲、香港亦十四機中十二機銃撃々破。かくてその最大の戦果、ハワイ、敵主力艦二隻轟沈、四隻大破、巡洋艦四隻大破、以上確実。飛行機多数撃破。長江にて英砲艦撃沈。米艦は拿捕。本十二月八日一一三五、畏くも、大元帥陛下より、英米に対し宣戦の大詔喚発せらる。尚陸海軍将兵に御詔勅あり感激に堪えず。只涙あるのみ。この夜ハワイ周辺及び真珠湾内にて我潜水艦の活躍あるべし。万々才也。天佑神助なる哉。

12月9日（火）　機動部隊北方に去り、世界はハワイの大戦果に驚倒す。外電によれば、戦艦ウェストバージニア、オクラハマ轟沈。外主力艦四隻大破。大巡四隻大破と我被害三十機。馬来に於ては上陸成功し、前日午後タイ国と協定成りてバンコックに進駐。非島の飛行場空襲にて計百機撃破。これに対し、我被害二機。香港空港を陸より猛攻。駆逐艦一隻大破。尚昨日中に拿捕せし船舶二百隻。八万屯に及ぶ。我艦船に損害なし。本日グアム、ウェーキ再度猛爆。いまだに敵の反撃なし。

突忽天兵至　奇襲屠艦列
多年積悪報　霹靂心肝裂

12月10日（水）　午後三時頃、我潜水艦の報告により、英国極東艦隊の主力部隊戦艦二隻、駆逐艦四隻馬来東方を北上中とのことにて、之に対し我艦隊は直に集結を計り、カムラン湾方面より南下の南遣艦隊主力と西貢南方海面に在りし七戦隊と三戦隊の二小隊と共に決戦を期して西進、夜に入って敵の所在を失し、今暁来追躡中、十一航空艦隊はシンガポール攻撃をやめ反覆攻撃の命を受け四潜水戦隊、三潜水戦隊は帰途は散開線を張る。我艦隊は本日〇一三〇集結南下。敵亦南下して遁走に努め、好餌を逸するかと思いしも、果然我空軍の猛攻に一四二九、巡洋戦艦レパルス号先づ我雷爆撃により轟沈、又巡洋戦艦プリンスオブウェルス号も大破遁走を計ったが同五十分、再度数多の命中弾を受け忽ち轟沈。かくて英国の新編制の極東艦隊主力は、その司令長官もろとも全滅す。一五三〇この快報あり、ブランデーの乾盃。一六〇五ニュース発表。開戦三日。先づ初日米艦隊主力を大破し、更に三日目、転じて英主力を屠る。あまりの戦果に、味方ながら、呆れ驚くばかり也。この日早朝我陸海軍は非島北岸及びグアム島に上陸成功。ウェーキ島三度猛撃。ウェーキ島の上陸は今夜なり。成功を祈るや切。

12月11日（木）　グアム島占領。敵戦意なく総督以下捕虜となる。これに反し、本日早暁上陸を企図せしウェキ島は、長濤のため、大発卸りず失敗し、昼間上陸を企てし所、敵戦闘機四機の空爆を受け、疾風、如月沈没。残念至極にも、「後退」の電命第四艦隊より至る。航空機の威力は正にかくの如し。これを軽視して対空砲力無き旧式艦のみを送り、又二四航空戦隊に長巨離戦闘機なき所に禍根あり。昼間強行上陸は失敗なり。零戦三機にてもあらばと、残念なり。本日独・伊共に対米宣戦。いよいよ世界二分の関ヶ原なり。」

ウェーキ島の攻略部隊は次のような編成であった。

本隊、巡洋艦夕張、駆逐艦望月・如月

第一攻略隊　駆逐艦追風、疾風・特陸一ヶ中隊

第二攻略隊　駆逐艦睦月・弥生

哨戒艇二隻、特陸一ヵ中隊

附属隊、金剛丸、金竜丸、潜水艦三

掩護隊　巡洋艦天竜・竜田

航空部隊　千歳空中攻三六機・水偵四機

いずれも旧式の艦船ばかりであった。第一次攻略は、十日夜半に上陸の予定であったが当日は風波強く大洋の只中とて、うねりが大きかった。哨戒艇の大発は、艦尾から辷り卸すので成功したが、金剛丸・金竜丸の大発は船の動揺で舷側に衝突して卸し方に失敗してしまった。このため指揮官はやむなく上陸を延期し、天明前に陸上を砲撃した上で、昼間上陸を強行しようとしたのであった。そこで夕張以下の各艦は〇三二五以降陸岸五千米位のところに近接して、砲台や飛行場を砲撃した。

ところが中攻隊による三回の猛爆で潰滅していた筈の地上砲台は、全砲〇四〇〇から猛反撃を開始し、駆逐艦疾風（艦長高塚実少佐）は艦尾に被弾、不幸にも、塔載していた爆雷が誘爆したらしく、瞬時にして轟沈した。次いでこれ又全滅した筈の敵戦闘機四機が、果敢な銃爆撃を反覆し、このため〇五四二には駆逐艦如月（艦長小川陽一郎少佐）は忽ち爆撃により轟沈して、いづれも全員戦死した。

そこで指揮官は全軍に避退を命じ、作戦は中止された。このとき既に大発数隻はウェーキ島南方海上にあって上陸待機中であったが、夕張以下避退してゆくので、今は単独上陸し玉砕を覚悟していた。そのとき駆逐艦睦月（艦長畑野健二少佐）は、只一隻敵の攻撃下に踏止まって、大発に横付けして全員を救助した上で引揚げたが、誠に美事な武者振であった。

僚艦の轟沈を目前にして、尚沈着に味方陸戦隊員を収容した睦月は、第一次攻略失敗の中での只一つの美談であった。13日〇六五〇攻略部隊は一路ルオット泊地に帰投した。

12月14日（日）日記

「四艦隊参謀と打合せのため九号監視艇にて朝五時発、機関参謀と二人、ルオットに向う。小艇とて艦橋の傍に腰かけて「改造」を読む。環礁内ながら揺れること揺れること。これで太平洋を乗り切ったとは偉いものなり。昼食弁当。午後二時やっと到着。夕張にて作戦打合せ夕刻四艦隊参謀来らざるをもって第六防備隊にゆき、厄介になる。

12月15日（月）　打合せは本日午後二時とのことで今一日帰りをのばし、睦月に畑野艦長を訪ひ、ウェーキ攻略の失敗につき種々教訓を受く。この失敗の原因は主として左記にあり。

一、準備不足（期日、爆撃不充分、上陸準備不足、敵戦力の下算）

二、実施の消極的なりし事（金竜丸、金剛丸が接岸せず、大発が卸せず）

三、砲台に対する下算（さぐり射ち低速力で砲撃）

四、対空砲力の不足（論ずるまでもなし）

疾風・如月の損失は誠に悲しむべきも、当然の帰結なり。更に充分の対策を要す。午後打合せ。名案

なく苦吟。哨戒艇接岸の冒険策のみ。深夜に至る。

12月16日（火）　午前夕張に至る。○六○○三十三機の中攻重々しくウェーキ島爆撃に向う。夕張にて司令官の決意を聞く。作戦至難を痛感。あとは断行のみ。黙して語らず、午後天竜に一寸寄る。甲板の弾痕生々し。八種高角砲はとても照準不能なりし由。さもあるべし。一四○○三号飛行艇にてクェゼリン着。七潜水戦隊、六艦隊参謀、十九航空隊副長来って打合せ深更に至る。」

指揮官の決意により、ウェーキ島再攻略は、12月23日と決定した。

（以下次号）

石橋湛山夫人のご逝去を悔んで

秋田　小室舜司郎

環礁十五号昨日戴き石橋ご夫人の訃報を知り、謹んで御冥福をお祈り申し上げます。慰霊祭にはいつもお元気なお姿をお見せ下さいましたのに。御夫妻は戦時中ひとときに当市に疎開なされたとか。先年靖国神社で御挨拶申上げましたところ殊の外懐しそうに想い出された御様子で、言葉を交わした私、身に余る良い想い出でしたのに。遠い北の地で合掌。本誌を通じ、衷心から深く哀悼の意を表させていただきます。

（46・12・7）

マーシャル方面遺骨収集報告

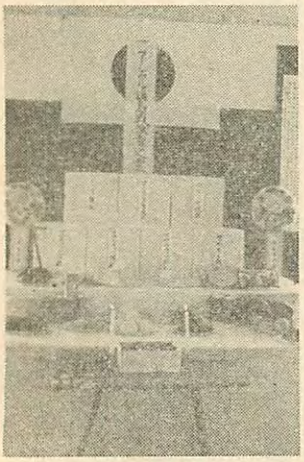
厚生事務官　千葉秀夫

私只今紹介にあずかりました厚生省援護局審査課に勤務している千葉でございます。

マーシャル方面遺族会の皆さんとは遺族会発足してから、環礁という機関誌でもって、ウオッゼの戦況とか、或は英霊に私共が護っていただいたことなど、皆さんに誌上を通じて、私書いたことがございまして非常にマーシャル方面遺族会に対して、深い関心をもっている者でございます。

なお私の勤務が皆さんのご家族の中で、戦死された軍人・軍属或は準軍属等の恩給・援護・遺族年金・弔慰金等の仕事をやっているのでございまして、私はいつでも、仕事の上に皆様達ご遺族のことのみを頭において仕事をしている者でございます。

又この度、先程お話のありましたように、マーシャル諸島方面の遺骨収集についても、昭和四十四年に私は是非マーシャル方面に行きたいという希望を出しておいたのでございますが、いろいろ政府の事情がございまして、ようやく昨年マーシャル方面の遺骨収集が実施されることになったので、千葉お前がはじめッから希望しているのだから、行って来いと云われましたので去年の十月三十日に羽田を出まして十二月一日まで約三十三日間の期間を、今からお話する島を廻って、遺骨の収集慰霊ならびに出発に際し、ここにおられる浮田副会長様から、いろいろウオッゼ或はマロエラップ或はヤルート等の終戦後の状況、実際にあの島々を、慰霊巡拝されましたこと等について資料をいただきまして、私がこの目で、この体で浮田さん、佐竹さんが、慰霊巡拝されたことに、間違いのないということをはっきり私共も見ながら、敬服して、それに負けないような気持で、今回行って無事任務を果して帰って来た次第でございます。



マジュロにて追悼式

最初のアメリカの許可は、今度日本から示された予定は全面的に許可するということで前回クェゼリン遺族会が行けなかったクェゼリン環礁のルオット島、エビゼ島、クェゼリン本島等にも行けるものと思っていたのでございます。しかし私は腹の中ではクェゼリン島は取止めになるだろうと思っていましたが、サイパンのハイコンミショナー（高等弁務官）のところに行きましたところ、案の定皆さん御承知のとおり、クェゼリン環礁はアメリカの軍事上の機密があるのでここには行けないということでした。致し方なくクェゼリンはカットしましてその代りに、あまり知られていなかったアイリングラプラプという環礁を廻って来ました。

戦争中アイリングラプラプ島風景（瀬沼様）

私は戦争中は、先程ご紹介がありましたとおり村上会長さんの息子さんの村上信一さんという海軍の二年現役の主計大尉の方と一しょに、同じ部隊で部下として、約一年間ヤルートからウオッゼに転進しました。司令・主計長、掌経理長が同じ建物の下で、爆死されたときに、私は丁度運よく或は調子がよかったのかどうかわかりませんが、いつもならば爆撃される波止場に糧食搭載に行っていたために生きのびたのでございます。従ってウオッゼについて非常に話が詳細になるかもしれませんが、その点ご了承願いたいと思います。残念ながらクェゼリン環礁のことは機関誌環礁で、皆さんが御承知になっている以外のことは私も承知しておりません。いま申しましたとおり私共もクェゼリンには立寄ることを許されませんでしたから。

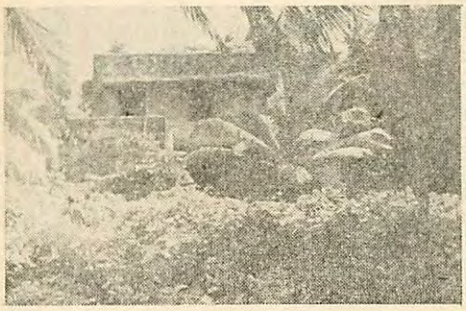
私が出発する前徳原さんという日本人の方が、本会の皆さんが、力を合わせクェゼリン島に建立された忠魂慰霊碑を現地でお建になっているということを承り、又私がマジュロにゆきましたとき、クェゼリンから、移転して来られた沖縄出身のニイという人がおりま

戦争中アイリングラプラプ島風景（瀬沼様）

したので、その方からいろいろ話をきいたところ、やはり徳原さんのお話どおりクェゼリン本島もルオット島も墓地は環礁の写真のとおり現在も立派に二世の方々がこれを護り、慰霊を行っていることを聞き喜んで帰って来た次第でございます。

私共は四年前本会の派遣員が行かれたように長い期間、体験された、あの厳しい苦労はありませんでした。期間としても三十三日に過ぎませんでしたが、その間サイパン島に寄り、米側に対し諸種の要請を説明し、協力を得るために約一週間を要したのでマジュロについたのは十一月になりました。そしてマージャルの政庁と交渉し、同地を出港したのは十一月七日日曜の夜でございました。夕方五時半にマジュロ埠頭から出港しましたがその日は丁度台風、日本でいえば台風というほどの台風ではないのですが、環礁内のことでございますので、多少波があっても、船が浅瀬にのし上げるというおそれもあり、その晩は礁湖内に仮泊して八日の朝三時に出港し一番はじめにミレ環礁に行きました。ここでは入口のタカイワ島とあと二ツばかりの島を廻りました。

ヤルート，イメージ島警備隊本部南側
御遺骨発掘


ウオッゼ八〇二空本部跡

私共の、こんどの遺骨収集の考え方は、浮田さんとも相談して、私の廻るマーシャル諸島には、二千或は三千という沢山の先輩、戦友そして後輩が戦死され、今日なおそこに眠っておられはしますが、全部の英霊をお迎えすることは、時間的にも、また地域の広さからも到底望めないところでございます。クェゼリン、ルオット、ブラウン島など玉砕した島は申すに及ばず、その他のところに眠っている我々の戦友、現に私もそうでありましたが、日本の対米最前線であるマーシャル、ギルバートに骨を埋めるならば、本望であるという気持ちでありまして、決して命を全うして、内地に帰ろうなどという考えは、全くもたず、ただ戦ったのでございます。

ただ私は武運がよかったのか、思いもかけず、九死に一生を得て帰還し、現在こうして、皆様の前で当時の様子をお話することができるのは戦死された我々の戦友先輩の方々の御蔭であると確信し、感謝の気持一ぱいで余生を送っています。

従って今となれば私はこれら私達の戦った島々に眠っている戦友のなきがらは、全部お迎えしたい心境でございますが、今申しますとおりこれは到底できないことでございます。一方終戦のときは、玉砕して生存者のなかった島は別として、生存者のあった島では、米軍の許容した量だけの御遺骨は、もち帰って、ご遺族にお渡ししていることを思い、

○　所謂離島で一人残り、戦友の見守りもない島に眠っているとか

○　我々の全く知らなかった島でその島民が埋葬して下さったというような、従って、内地に迎えられる機会が、全くなかったと思われる英霊を迎えて帰ろうと考えました、もう一つは

○　サイパン島やテニアン島玉砕地のように人跡稀れな、洞窟、山野に、今尚白骨として残り或は雨露に晒らされている

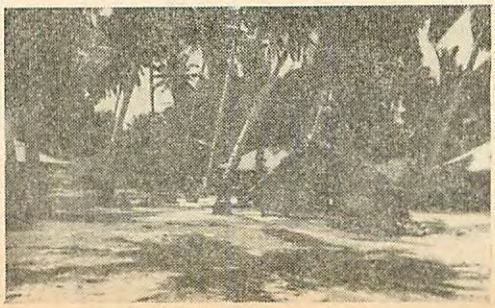
このような御遺骨があったら、これは全部収骨して帰る。そのような心境、そのような予定で十日間というものを、船で廻ってまいりました。

ウオッゼ内海岸

実際行って見ますと、四年前浮田さんと、佐竹さんが行って慰霊、収骨、巡拝したときと同じように、島民は、こころよく私達を迎えてくれ、話を交しますと我々の戦友は、その後も、静かにその地に眠っていることを、はっきり見届けてまいりました。

ウォッゼ環礁では、あの当時、爆撃のあとは、一本の椰子の木も残っていませんでしたが、二十余年を経た今日では、私達が一番はじめあの島に着任したときのように椰子の木も蔚蒼と繁っておりました。そして根元に我々が埋葬した場所の枯葉を除いて見ると御遺骨があらわれるような所もありましたので、そのような場合はその御遺骨はお迎えしてまいりました。

実は戦後、私共は知らなかったことで、「環礁」には掲載されてありましたように、米軍は終戦後日本軍が全部引揚げたあとも、南洋の島々を爆撃目標として猛爆を繰り返していたようであります。ですから今回訪れたとき、引揚当時とは、何とみても、形の変ったと思はれるものがございまして、アッそれは我々の引揚後米軍がやったナと思うものがありました。


戦争中アイリングラプラプ島風景（瀬沼様）

ウォッゼの酋長カンパさんは、施設部の発電所の中で、爆撃のため堀り出された二十数柱の御遺骨を拾い上げ、お祀りしておいて下さったのをいただいて来ました。又同島警備隊側に警備隊が作った墓所から、爆撃のため放り出されたと思はれる御遺骨約二十四、五体収骨してまいりました。その他ウォッゼ島では約百体の遺体を収骨いたしました。

ミレ環礁の場合は、主として離島で約十四体

ヤルート環礁でも、離島を廻って約五十体を収容しました。

先程申しましたアイリングラプラプ島では約四十二体を収容しま

した。

一番多く収骨したのはマロエラップ環礁でした。「環礁」八号にも載せられてありましたが、終戦後疲労しきった生存者の力を集め引揚げまで鎌田少将指揮で建立された墓所が、日本軍引揚後の米軍の盲爆によって無惨にも壊されていました。そこから約五百体。

鉄蓋の下に、私共の目に見えておりましたので、これを収骨してまいったのでございます。

結局御遺骨としては大体七百柱収骨し、あとは何れも静かに眠っておられますので、浮田さん佐竹さんと同じように、慰霊、供養しその御冥福を祈り、去りがたきところをふり切って、次々と島をまわったのでございます。

なお、ここで最後に申し上げたいことは、島の人々は、私達日本人を非常に恋しがっているということでございます。

いつまでも又何事があっても、我々は、この御遺骨を、お護りするから安心して下さるよう、内地―彼等はいまでも、日本のことを内地といいます―内地の人にお伝え下さいといってくれたことです

私共の案内役をつとめて下さったのは、浮田さん、佐竹さんの御紹介による、もと日本人山村カナメさんという方でございまして、本当に献身的に隅から隅まで案内して下さいました。現在マジュロに住んでおられます。

とりたてて御聞きいただくような土産話もございませんでしたが。この方々のご案内またお力添えによって任務を全うしたことを感謝いたしております。

私達の戦友、先輩は、今なお間違いなく、島々に故国日本の平和幸福を祈りながら故国を想い、温い島民に護られ、安らかに眠っておられる御様子を、私はこの目、この体で、しかと見、しかと味って来ましたことを、皆さんにご報告申し上げまして、簡単では、ございましたが、私の報告を終らせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

その外にもう一つ、ギルバート方面タラワ環礁、マキン環礁のことについて、この機会に、承知の範囲の話をとのお求めであり、かつ、時間もまだあるとのことで、ございますので、ちょっと加えさせていただきます。

実はマーシャル諸島とギルバート諸島とは隣同志の島であり、極く近いのでありますが、ギルバート諸島の遺骨収集は、私共より、一ケ月早く、ガダルカナル、ツラギ島の収骨団の一部の者が、その途中からフィージーを経て、タラワ、マキン、アパママを廻って収骨して来たのでございます。

イメージ八〇二空の爆撃跡　横たわるはカマボコ型防空壕

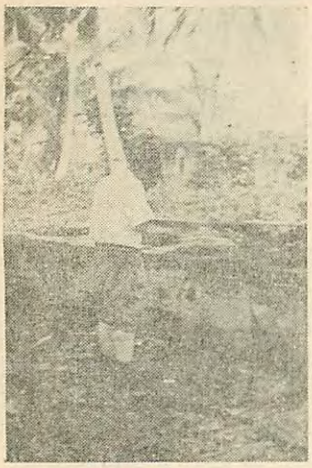
マーシャル方面遺族会では、この前既に、浮田さんと佐竹さんがこの方面もすっかり廻り遺骨収集し、慰霊をし、碑を建てることまで成し遂げて来られたことは皆様の方がよくご存じのところであります。

元来ギルバート方面は英領でございましたので、仲々OKが来なかったため、出発もおくれましたが、結局やはり許可が来ました。

そこでソロモン諸島中ガダルカナル方面の収骨団四名中二名が分派されて、ギルバード諸島に行きました。そしてタラワ環礁特に有名なペチオ島、マキン環礁、アパママ環礁といった島々で百体ばかりの御遺骨を採集して来ました。

これらにつきましても、マーシャル方面遺族会から、この前行って、土地の人々或は政庁の方々とよく連絡をとってありましたので、この度政府派遣団員の行くときも好都合でした。特にこちらの会の特別会員として今回御入会になり本日ここに見えておいでの藤平直忠さんは、タラワの政庁に対し或はペチオ島における酋長等に、自費を投じて、高価なトランジスターラジオと、御遺族皆さんの気持をかいた手紙、しかもそれを英文に訳した文書など添付したという心遣いもございましたので、政府の遺骨収集も、非常に順調に、しかも先方からこの辺に埋葬してあるという地点まで通知を受けるということまでありました。ただ残念乍ら前以って米国側から示された緯度、経度の地点が礁湖の真ん中になるというようなこともございましたが、このような協力の便宜を図っていただきました。前のマーシャル方面遺族会のつながりもあって、今回の政府の遺骨収集も至って順調に終ったのでございます。これらについては、今日は充分の資料もありませんが、会の方から申し出されれば、「環礁」を通じおしらせすることもあろうかと存じます。戦争中はマキン島に私共の基地があり私もそちらで従軍いたしておりましたので当時のマキンはどうであったかは存じておりますが今回収骨した場所や、その点については、実際見ておりませんので多くは申せません。

しかし政府派遣団の帰ったお話をきくと、よくもこんなに収骨が出来たものだと感嘆いたしております。これもやはり皆さんの遺族会の力が預って大であったと私は思う次第であります。



ウオッゼ北地区八〇二空炊所跡

アイリングラブラブ島守備員（瀬沼様）

会員だより

新潟　高林　セキ

先日は慰霊祭、直会旅行、重々お世話様でした。ほんとうに楽しく過ごさせていただきました。雪国の私等にとっては、雪のないのが珍らしく、南方へでも行ったような感じでした。靖国の英霊もさぞ喜んで下さってのことと思います。今年は長男の嫁と一緒にお参りさせて頂きました。

嫁が「お母さんが出席出来なくなったら、私等がお参りさせて頂きます」と。そうしてこの遺族会に感謝感激していました。来年の二月六日は孫も一緒にと、今から楽しみにして居ります。

玉砕二十年後のタラワ環礁

長谷川　敏

「環礁」第14号、第15号に出ておりましたタラワ環礁の記事を、大変関心をもって読ませていただきました。

そこで、私も戦後、タラワえ行って来たときの様子を、思い出すままに記してみようと思います。この拙文が、いくらかでも皆さまのお役に立てば幸いです。

一、タラワ環礁ベティオ島

私は以前、仕事の関係上（天文測量）、ミクロネシヤの島々を歴訪しました。そしてギルバート諸島の位置の経度、緯度の値は、数百米もずれていましたので、正確な値を出すため、タラワにも訪れました。

それは玉砕後二十年たった昭和39年2月14日から3月7日まで、同年4月2日から4月28日まで二回です。この間、あの激戦の行われたベティオ島も含めて、タラワ環礁のあちこちの島々を廻り測量しました。

さて、ベティオ島は、「環礁」15号9頁の地図のように、タラワ環礁の南西のはづれにあります。最初、船上からこの島を見て驚いたことは、その有名さに較べて、余りにも小さい島だということでした。クェゼリン島の方は、同じく珊瑚礁の島でも、世界最大といわれる環礁中の本島で、ベティオ島は、その1／10の面積しかないでしょうか。ほぼ小銃形をしたその島の端から端までは、僅か5粁ほどということです。

「あの〝恐怖の島タラワ〟として米国に名をとどろかせた島は、こんなちつぽけな島だったのか。ここが何千何万という両軍が死闘を展開した所か」

と、クェゼリンやマロエラップなど多くの環礁の島々を見なれた私も、最初は別の島へ着いたのではないかと疑ったほどでした。

そもそも環礁中の島というのは、珊瑚の骨の集合で出来ているとかで、高さはせいぜい海面上数米と低く、平坦な上、形も細長く、面積も数平方粁とせまく、嵐でも来れば島中が海水で洗われてしまう程のものです。この点、同じ南洋の小島でも、火山性のグアム島やペリリュー島などは、島の構造が全く違います。

次に驚いたことは、この島全体にぎっしりと、旧日本軍の陣地や兵器などの残骸が残っていたことです。特にトーチカ、大砲などの大きな物は、東西方向に走っている島の両端に多く、それらの辺りでは、数米位の間隔で、配置されて残っていました。しかし小さな砲や、塹壕などは整理されてしまって見当りませんが、これらは現存している大物の陣地の間を縦横に走っていたものと思われます。原住民達は、これら整理された跡などに、残骸の隙間を縫って家を構えている有様です。

さて、驚いたことの第三は、タラワ環礁では干潮になると、海水は遙か遠くまで引いてしまうことで、海岸に立つと、遠く水平線の所にだけ海水が見える程です。つまり、ここの海辺は非常に遠浅になっていることです。

この現象は内海（環礁を形作る島々で囲まれた内側の方の海で、この中の海は静かである。＝礁湖）側ばかりでなく、外海（環礁の外側の海で、波は荒く、通常内海より深い）側もです。マーシャル諸島では、こんなに引くのを見たことはありません。

これはベティオ島ではなく、タラワ環礁中の他の島え行ったときのことですが、島の若者達とソフトボールをするのに、島には適当な広場がないので、潮が干くのを待って、その干潟でやりました。私達は大いにこの「球場」を活用しましたが、ただ足場が柔かいのには閉口しました。しかし、そこがまた笑いの種となりました。

ベティオ島の潮の引き工合も同様です。しかし、ベティオ島の干潟ではソフトボールはしませんでした。と申しますのは、上陸用舟艇など、激戦時のいろいろな残骸があちこちからその錆びた姿を現わすことが一ツと、それからベティオ島の島民達とは、それほど親しくつき合えなかったからです。

ついでに申しますと、当時、時折連絡に来る水上飛行機は、ベティオ島には着水せず、隣りの小さなバイリキ島（ここにギルバートとエリス地区の政庁がある）の海辺に着水します。（浮田註―環礁15号に掲載のとおりフィジー諸島のナンジー空港との間に週二回の航空便あり）タラワ環礁は、このように潮が大きく引くので、この環礁の端から端の島まで徒歩で渡ることが出来ます。ヘンリー、アイ、ショーの「タラワ」を読んでも彼我の兵隊達が徒歩で隣の島へと移動したことが出ています。これも余談ですが、私達がこの環礁の西北方の島にいた時、島民達が私達の歓迎パーティーを開いてくれましたが、そのための品物を買いに南西端のベティオ島まで、島の人が干潮時を見はからって自転車で渡って行きました（往復約百粁）。

このような非常な遠浅のため、戦争当時、米軍が上陸用舟艇を途中で乗り捨て、徒歩での敵前上陸を余儀なくされたため、日本軍の絶好の目標となったという話もうなずけます。

二、壕に残る戦いの跡

ベティオ島の内外には、激戦の跡が、二十年の歳月が流れ過ぎたものの、少なからず残っていました。

まず、壕等について述べて見ますと、日本軍のコンクリートの建物が、大小三十個ぐらいと、二―三人用の鉄製の六角形のものが二、三個程残っていました。コンクリート造りのものは、すべて四角な建物でして、何れも半地下式になっていました。

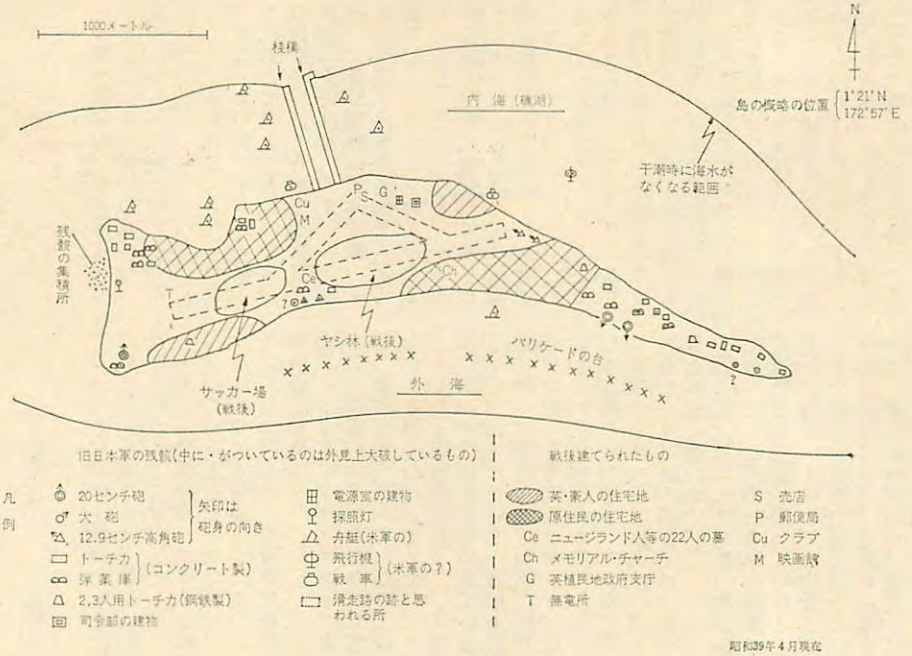
即ち、島のやや中程、内海側に港がありますが、そこから少し東へ寄った所に、殆んど完全な形のままのコンクリートの建物があります。これの出入口は屋外の階段を半地下に数段降りた所にあります。ここは電源室だったらしく、中に大きな内筒形の発電機らしいものが一台、薄暗い部屋の左半分に疲れたように座っていました。（部屋の右半分には何もありませんでした）。この機械は大して破損していなかったとかで、私達が訪れる少し前まで、代って島の人達が使用して、電気を起していたとのことです。なる程、この建物の外には、電柱が一本設けられ、電線が内部より引かれていました。

更に、この建物の東隣りには、電源室より一廻り大きい、島で最大のコンクリートの建物があります。地上に出ている部分の高さは、約六メートル、前後七メートル、左右は十米以上もありましょうか。そして、出入口は内海海岸の反対側に二ヶ所ありましたが、そこの掩体のコンクリートの厚さは、実に一メートル以上もありました。銃眼は内海側（海岸側）に向って大小十個ほど、あちこちについていました。この建物が旧日本軍の司令部跡だそうです。

私は出入口近くにある階段で屋上に上りましたが、そこには雑草が一ぱいでした。なお、そこを降りる途中、手すりのない湿った階段で足を滑らせ、腰は打つし、カメラのレンズフードは落すしで、島民の子供達に笑われてしまいました。

この建物の周囲に残っている椰子の木々は、硝煙で黒ずんだ跡が痛々しく、またコンクリートは所

ギルバート諸島タラワ環礁
ベチオ島の戦跡略図



所小破されて、ひん曲って赤錆びた太い鉄筋が内部からむき出していました。しかし建物自体はビクともしていません。或る米人の戦記によりますと、この中にたてこもって抗戦した二百名程の将兵は、火焔放射器でやられたということです（前述「タラワ」には、この司令部での攻防については記されてないようです）。頑丈な構造が却って悲惨な死を招いたと云うべきでしょうか。

この建物の内部は、僅か、銃眼などから入る光だけのため良く見えなかったのですが、二階建で、また、しきりによって幾つかの部屋に分れていました。そして、日本軍の遺品などは整理されてしまい、それらしい物は何もないようでした。代って、材木や古びた車のタイヤなどが転がっていて、かっての司令部は、今は島の人達の物置と化していました。しかし暗さとガラクタ物のため、足許が不案内なので、私は改めて、この次は懐中電灯を持って出直して来ようと、二階への階段途中より引き返しました。……だが、その後この建物の前を何度か通ったものの、とうとう内部へは再訪しませんでした。忙しかったとはいえ、この事は今もって心に強く引っかかっています。

以上、電源室と司令部の建物について詳しく記しましたが、このように一つ一つこまかく書いていては紙数がもったいないので、あとは総括的に述べるだけにしておきます。

さて、この他、島中には角型やかまぼこ型などをしたたくさんのコンクリートの建物―というより半地下壕―が残っていました。

これらはトーチカ、弾薬庫、食糧倉庫などに用いられたと思われます。そして、例えば、日本軍が追いつめられたという島の東端の砂浜にある角型のトーチカは、二十年の歳月によって、屋根近くまで砂に埋れていました。そして、その屋根の部分が少し破損しており、その厚さ五、六十センチのコンクリートの内部からは、数ミリの部厚い鉄板が二、三枚サンドウィッチ式に狭み込まれているのが見られました。

このように、何れの要塞、倉庫も、かなり堅固に作られており、これらコンクリートのものは、殆んど完全な形のままで残っていたものが少くありませんでした。

戦記などに見るように、米軍は上陸に先立って空と海から雨あられと、この一小島に弾丸を叩きこんだとのことですが、それにしてもこれらの壕は、よくこの猛爆に耐え抜いたものだと感心しました。……そして、今も厳として残っていたその姿は、私には戦後いつかは訪れるであろう同胞に、主に代ってそのすさまじかった奮戦ぶりを伝えるかのように思われました。

ところで、これらの建物のうち、1/3ほどのものは、出入口が砂で塞がれてしまって中へ入れません。それは二十年の歳月の間に、周りの砂が崩れてそうなったのか、或は誰かが人工的にそうしたのかはわかりません。私は出入口が塞がれていず、中へ入ることが可能なものの殆んどの壕の中へ入ってみました。赤道直下の強い陽光から、急に壕の内に入りますと真暗でしばらく何も見えません。ようやく闇に慣れてから狭い周囲を見廻すわけですが、ジメジメとした内部にはカドガニがゴソゴソとはっていたり、破壊された部分の穴から砂がこぼれ落ちていたりしているだけで、残念ながらやはり遺品らしいものは何も見出せませんでした。

なお、この地の英国のコミッショナーは、これらの壕の中に入ることは禁じていて、英語とギルバート語でその旨を記した立札が、島のあちこちに立てられていました。それによりますと、不発弾がまだ完全に取り除かれていないから危険とのことです。現に私達が滞在中も、ニュージーランドから数名の兵隊が来島して二五〇ポンドの不発弾などを爆破処理して行きました。その他、小さな砲弾もあちこちの草むらなどに、いまだに転がっていました。それらのうち、私は幾つかの腐ってボロボロになった小銃弾を拾い、タラワの記念にと持ち帰りました。他に、白い珊瑚の砂も持って来ましたが、これは私の帰国後、朝日新聞（39年7月25日夕刊）や、アサヒグラフ（39年8月14日）などへ出したタラワの写真を見て、お便りを下さった方々へ全部分けて差し上げました。

（未完）

今年の直会旅行記

秋田小室　舜司郎

拝啓　この度又も慰霊祭に参加させていただき昨年にもまさる数々のよい想い出を得ました。

まず靖国神社の参集所で多数の会員が集まって来るなりヤー、アラ、マーと一年目の再会に無事を喜び、手を握り合う非常に和やかな光景が各所で見られ私も遠くからおいでですかと声をかけられ互いに言葉を交しましたら、なんと偶然にも亡弟と同じ島に居られ「環礁」に度々記事を載せて下さる土屋さんでした。土屋さんは航空隊、弟は警備隊でしたので弟のことはわからないそうでしたが、ウォッゼの戦闘状況など度々誌上で読みましたので非常に懐かしく語り合いました。土屋さんも昨年の私の想い出の記を見て下さったとのことでした。

次に千葉厚生事務官の南方各島遺骨収集巡回状況の御報告を承り、大変御難儀なされたことと思い感謝の外ありません。千葉さんも弟と同じ島に勤務され「環礁」で度々記事を拝見して居りますので、殊の外懐かしく感じました。どの島にも放置されている遺骨全くなく、米軍によって、それぞれ収骨手厚く整理されてあった由、かつては敵として戦った米軍……戦争は終ったのだあのような忌わしい戦争は再び繰返すべきでないこと一層深く感じました。また各島民感情も非常によく、親切で、懐かしそうに、軍歌を歌ってくれたとか、三十年も前のことを思い出してくれた島民の気持を察し思わずジーンとくるものがありました。

残念なのは今だにクエゼリン上陸の許されなかったことで多勢の戦死者を出し、そして立派な碑まで建てたのに残念でなりません。

そして神前に昇り、慰霊祭では祝詞奏上の神官さんは神社でも高位のお方とのこと、霊はどんなに喜んだことでしょう。何か優越感を感じているかのように想像されました。

九段会館での総会これ又毎年のことながら会員一同何事も協力的で従って順調に終了。その席で、成宮先生より信玄水由来について御説明あり、水を欲して散華された霊には供えられた水をどんなに喜んだことでしょう。

先生は神さまもお正月中お酒の奉納が多くて二日酔気分かと思い水をお供えしたと軽い冗談をつけ加えられるあたり環礁ミレー抄(2)に載る殺伐な戦場での兵と共に一と時の心の綻ぶような字句のあるのから先生のお人柄が偲ばれ思わず笑を感じました。

そして雑談を交わしながら楽しい午食を共にし終って直会旅行会出発となり、残念ながら夕方から小雨となりました。予報では東京地方雪とかだが、行先は南房総で、寒さはそれ程でなく、車内では近くの席の方々は、小泉さん山浦さん方でした。本会発足由来については度々誌上でも拝見しましたが、山浦さんのお母さん方数人の方々が参拝に参られて年を重ねる毎に顔馴みとなり、話会われたのが、始まりとのこと、改めて御両人より承り、それが現在このように全国津々浦々にまでの会に進展し、尚年と共に、益々盛んになるのは本部各位の御努力と会員皆々様の御理解によるもので同じ境遇にあるもの、同志の協力のあらわれであり、殊に本会の特徴は全て自力で事を行う精神だと思います。

現世代ではこのような会が何か事業をするとすれば、政治的に働いたり、政府に働きかけたりする、慰霊が例ですが、本会では現地巡拝の慰霊から、慰霊碑建設の大事業も全て自力でやりましたので他にはそんな例はないでしょうなど、語り合いました。

旅館よしのやでは例年通り楽しい懇親会、語り合い、それぞれの隠し芸など続出、時の経つのも忘れる仕末、それに今年は本会に縁のある高木さんや、浮田さんのかつての教え子である相川さんの御参席を得ましたことで、その楽しさが倍増されました。車内で浮田さんより相川さんとの古いエピソードを承りまして、そうしたことが、殊更ご両人の中を一層深くしたことで、こうしてわざわざ訪ねて来られるのも、浮田さんの御人徳の現れであると思います。加えて私達にまでお土産品お分けいただき本当にありがとうございました本会を通じ厚く御礼申し上げます。翌七日朝食前に鴨川フラワーセンターを見せていただき、風が少しあるので、鯛の浦への船出はどうかと心配されたが幸い大したことなく船は出たので珍らしい天然記念物の鯛の自然生息状況を見られたのが何よりでした。一部予定を変更し寄らずに帰ったところもありましたが、人工的観光地は又の機会でもよいのです。

千葉厚生事務官の報告を聞く

直会旅行バス内

ホテルよしのやの夕餉

鴨川フラワーセンターにて

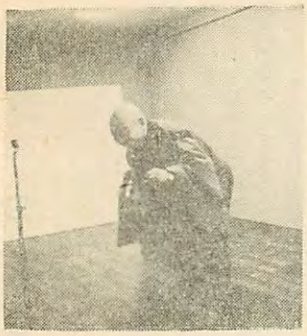
フラワーセンターのいけす

す。

終りに臨んで本部役員各位の御労苦を感謝申し上げ、御健康をお祈り申し上げます。また来年も宜しくお願い致します。楽しみにお待ちして居ります。（47・2・21）

私はこれからも足腰の利く内は毎年参りたいと思います。いや私だけでなく環礁十三号で大寺さんのお言葉のように、子供孫と何時までも続けたいと思います。私自身も、戦争の体験があり、亡くなられた戦友を思えば参拝せずには居られません。

そして英霊の皆々様のような犠牲を出す戦争は再びなすべきではないと衷心より思うのでございます。


素晴らしき余興（京都高津三代治様）

○マキン島知事ビナウェアーシューターケ氏からの航空便

（3・15）

「何年前でしたか、あなたが初めてブタリタリに来られお目にかかってから長い月日が流れました。

あなたが下さった沢山の写真をとって下さったご婦人（佐竹さんのこと）に厚く御礼申します。私一家の健康を望むと同じ様にあなたの御家族が健康に、お幸せでありますことを心からお祈り致します。

只今私の島ではいろいろの計画が進められており、現に飛行場や農場が開かれました。間もなく更に色々のことが具体化されてゆくと思います。数年後にはフィジー島やナウル島と同じようにギルバード、エリス諸島も独立することになるでしょう。これが私のコラルアイランド（珊瑚礁の島）からのニュースですが、今頃この島ではどんなことが起っているか、お忘れなく御承知下さるようお願いします。是非お手紙を下さいますようお待ちします。

徳原徳子様より

（ハワイから）

昭和47・5・27受領

私が、先月二十五日エビゼを去って以来、今日で丁度一ヶ月経ちました。知人宅に居候をしながらアパートを物色していましたが、やっと手頃のが見つかり、昨日引越しを終ったところです。

飛行場に近いごたごたした下町ですが、交通の便が良く、私の三階にある部屋は風通しが良く、窓を開けると寒いくらいです。七年間の南洋での、のんびりした生活から、いきなり都会生活に戻ることは、色々な意味でしんどいことです。このあわただしい生活に馴れるまでには、まだしばらくかかると思います。しかし何とかやってゆけそうです。

徳原は六月下旬に一時休暇をとって戻って来る予定です。毎週日曜日に徳原から便りがあり、クェゼリンの様子を聞いて居ります。

マジュロに行こうか、どうしようかと色々迷いましたが、結局これでよかったと思います。まだこれから先、就職の問題や、生活の苦労などがあるのは覚悟しておりますが、いづれはこういう風に落ちつかなければならないのですから、早くスタートするにこしたことはありません。徳原は今年十二月までは契約がありますので、クェゼリンに居ります。せいぜいお役に立ちたいと存じますので、何なりとお申しつけ下さい。

取敢えず引越のお知らせまで。皆様によろしくお伝え下さいませ。

新住所は

1009 Long Lane, Apt 301
Honolulu, Hawaii 96817

二月六日の慰霊祭・定期総会・直会旅行報告

前日九段会館に宿泊の会員二十名、例により誠になごやかな集りでした。

二月六日慰霊祭前午前十時からいつもの参集所で、昨年収骨、慰霊のため一ヶ月余の日時を費し、マーシャル諸島に、政府派遣団として参加された厚生事務官千葉秀夫様の御報告を承りました。（お話の内容はテープの録音から四頁―六頁に掲載）

慰霊祭には特に鈴木忠正弥宜様の御奉仕をいただき一段と荘厳さを加え、何となく英霊のお悦びを肌に感じました。

慰霊祭のあと九段会館大食堂において第10回の定期総会を開催しました。一般経過報告につづいて昭和四十六年度の決算報告並に監事の監査報告があって、昭和四十七年度の予算の説明にうつり、全員の御承諾を得て予算の決定をいただきました。

次に副碑建立の件につきお諮り致しました。即ち、副碑は昭和49年2月6日の30年祭を期し、靖国神社に奉納することを目途とし

一、本年末までに全国都道府県の銘石を本部に集めること。

二、昭和48年末までに完成すること。

三、製作は本碑同様第一石材工業株式会社（社長は本会会員、内海軍三殿）に委託する。

四、製作費用は社長の犠牲的御提案もあって六〇万円とする。

五、資金準備、主として有志会員の寄付金に依存する。万一不足を生じたとき総会に諮り「現地慰霊碑維持基金」の一部を使用する。

以上本部提案は、全員の拍手賛同を得て、決定。

つづいて役員の選任については常任幹事橋口昭利殿を幹事に、幹事井上賀雄殿を常任幹事に、その他は全員再任との提案も全員のご賛同を得て決定されました。

つづいて、別席で午食に移りましたが、既にどなたもがお顔見知り、また会えましたネ、明年も是非お目にかかりましょうとの約束、よそにあまり見ないなごやかな一時でした。

午後直会旅行参加の方々は九段会館正面玄関前の広場からバスで出発しました。参加なさらない方は声をかけ、手を振って励まされました。バス旅行のことは9頁を御参照下さい。

決算報告、予算説明中昭和47年度への繰越金六六三、〇九三円は、昨45年度から46年に繰越された、一、〇三九、四九三円に比し著しく少ないのは会費収入の減に基くもので、これはやがて運営の困難につながることであり、会費納入の励行が強く望まれました。

第八期決算報告書　（自昭和46年1月1日　至昭和46年12月31日）

マーシャル方面遺族会

収入の部

科目	予算	決算
	(円)	(円)
前期より繰越金	1,039,493	1,039,493
会費収入(46年度分)	554,000	318,300
〃 (47年度分預り)		164,000
〃 (48 〃)		13,000
〃 (49～56 〃)		6,000
寄附金等	1,000,000	739,805
受取利息	70,000	86,542
仮受金(旅行費預り金他)		78,500
雑収入	50,000	90,092
合計	2,713,493	2,535,732

支出の部

科目	予算	決算
	(円)	(円)
慰霊費	80,000	46,000
刊行費	400,000	226,295
印刷費	300,000	155,000
事務所賃借料	140,000	126,759
運営費	1,000,000	729,474
通信費	150,000	65,956
事務用品費	20,000	26,365
会議費	10,000	0
振替払込料	40,000	25,445
預り金返済		70,400
雑費	23,493	945
予備費	150,000	0
借入金返済	400,000	400,000
次期へ繰越金		663,093
合計	2,713,493	2,535,732

財産目録

摘要			金額
			(円)
資産	現金	手許現金	10,115
	普通預金	都民銀行学芸大学駅前	441,205
	〃	富士銀行祐天寺	10,854
	定期預金	〃 〃	1,500,000
	〃	都民銀行学芸大学駅前	200,000
	振替預金		919
合計正味財産　(昭46.12.31現在)			2,163,093
備考			
正味財産の内訳	・現地慰霊碑維持基金特別勘定		1,500,000
	・次期へ繰越金		663,093

註）1.　収入の部、寄附金等の金額の中には副碑建設のために寄せられたものも含んで居ります。

2.　次期繰越金の金額の中には、次年度以降の会費預り金及び旅行会の預り金を含んで居ります。

以上監事の監査を経て御報告致します。

昭和47年2月6日

第九期（昭和47年度）予算

マーシャル方面遺族会

収入の部

科目	予算(円)
昭和46年度よりの繰越金	663,093
昭和47年度分会費収入	586,000
寄附金等	750,000
受取利息	70,000
雑収入	50,000
合計	2,119,093

支出の部

科目	予算(円)
慰霊費	80,000
運営費	1,000,000
刊行費	400,000
印刷費	50,000
通信費	50,000
事務所借用料	140,000
振替払込料	40,000
事務用品費	30,000
会議費	10,000
雑費	40,593
予備費	200,000
預り金返済	78,500
合計	2,119,093

（註）〝環礁〟発行及び郵送等のすべての費用は刊行費で処理すること。

副碑製作につき
銘石送付のお願い

副碑を謹製してこれを靖国神社に奉納することは昨年の総会で決定され、本年の総会では、具体的に昭和四十九年二月六日の三十年祭を期し奉納することを目途とし、まづ本年末までに、全国都道府県の銘石を集めることと決定されました。今回は特にご協力下さる都道府県庁があれば感謝して頂戴いたしますが、さもなければ会自身で集めることとし、銘石を準備していただく世話人の方を本部で選び、その御氏名と御住所を下欄に掲げました。予めご了解もいただかず申訳けありません。御忙しいことを知り乍ら、御迷惑と存じますが、世話人以外の方は、この点御賢察の上、世話人の方と御連絡いただき絶大の御協力賜りますよう本部役員一同からお願い申し上げます。

銘石名　本碑に用いた銘石名は環礁13号と14号に掲載いたしましたので、なるべくこれと同じものがよろしいかと存じます。

寸法　環礁14号16頁に掲載の通り、縦横25ミリ、厚さ15ミリです。加工がむつかしいようでしたら内海様がお引受け下さるそうですから、この寸法のものがとれる大さの原石をお送り下さい。

都道府県名の記入　内海様がお引受け下さいました。

期日　本年十二月末日までに本部に届くようお願い致します。

都道府県名	銘石準備世話人	上記方の御住所
北海道	宮前ハツエ様	札幌市菊水南町三―一八
〃	犬伏　隆様	札幌市白石町平和通り一三の南三番の八
青森	工藤　ハナ様	青森市沖館字小浜一五五
〃	田中　ロク様	青森市石江字江渡五〇―七七
岩手	金戸　賢一様	岩手郡雫石町上野
〃	橋本　ミヨ様	岩手郡岩手町川口六―七―三
宮城	卯花要一郎様	仙台市原町二―一―五一
〃	平形せいこ様	仙台市新寺小路五〇
福島	上野　ナヲ様	いわき市山田町下堀之内一八
〃	坂本　吾郎様	いわき市小川町三島字上川原
山形	赤塚　美正様	天童市貫津一九六
〃	森谷　利雄様	天童市久野本一五二八―二
新潟	青木　謹次様	豊栄市太田二―一七二
〃	高林　セキ様	栃尾市金町
茨城	鴻巣　千太様	竜ヶ崎市馴馬町二三一三
〃	宮本　スエ様	行方郡玉造町乙一一五七
栃木	菊地　彦亘様	足利市小曽根町三一二―一
〃	西倉　ヨシ様	足利市通三―二六〇六
群馬	城田ミツエ様	高崎市江木町一二五四―三
〃	新後閑　彰様	高崎市下和田町四九
埼玉	幸島　敬資様	秩父郡大滝村中津川二四三
〃	藤田きよせ様	戸田市上戸田三―三―一七
千葉	相川　孝夫様	市原市石の神四六一
〃	広原　チヨ様	市原市姉崎三五六六
東京	内海　軍三様	港区芝白金三―一四―三
神奈川	岡野　正文様	横浜市神奈川区三ツ沢南町二―一
〃	大槻惣一郎様	川崎市浅田二―七―三　藤荘
山梨	黒川　孝平様	塩山市上於曽一一五五―三
〃	橋爪助次郎様	塩山市千野三三六二
静岡	清水　ひさ様	島田市本通り五―八三二七―一
〃	土屋まさ子様	賀茂郡下田町白浜一七〇一―一
富山	村梶　光栄様	小矢部市埴生一六一七―五
〃	吉田　よく様	小矢部市金屋本江二九五一
石川	寺西ときわ様	金沢市額谷町二―七
〃	永井　武弘様	金沢市小立野一―三一―一五
福井	青木みねを様	福井市羽坂町二七―五
〃	梅田　清子様	福井市境町二三―一〇
長野	岡島みね子様	長野市三輪九―四七―一八
〃	宮入　貞夫様	長野市篠井布施高田七二五
愛知	小山内小美賀様	春日市牛山町一一〇五
〃	川村　正一様	名古屋市中区丸の内一―一五―十一
三重	福田　秀一様	四日市市二―一五―一三
〃	宇野　義光様	四日市市小曽根五―一二―四
滋賀	小林寿賀子様	愛知郡秦荘町常安寺三四四
〃	高木　専治様	甲賀郡甲西町夏見一六四〇
大阪	伊藤　登様	大阪市都島大東町一―一二―二三
〃	安井　文子様	大阪市天王区小宮町一六―一住宅四―八
兵庫	岡本　くま様	津名郡津名町志筑一四九
〃	瀬川　英治様	氷上郡山南町前川一七八
奈良	谷口　スエ様	桜井市桜井駅前通り一七一
〃	香谷　禎逸様	御所市樽原一九一一
和歌山	谷口　たき様	和歌山市西浜二―九―六六
〃	山中　フジ様	日高郡印南町印南原五六〇七
鳥取	杉山　及江様	東伯郡大栄町由良
〃	田中はつの様	東伯郡大栄町西園一〇三二
岡山	宇山　アサ様	井原市井原町一四七九
〃	木村　謙輔様	倉敷市児島稗田町八四一―二
広島	小林　アヤ様	呉市広町長浜東三区
〃	石田　史郎様	呉市広町長浜東七
山口	児玉　富子様	徳山市戸田阿高一八六〇
〃	福谷　幸子様	徳山市弥生町一―一七
徳島	西　ハナ様	板野郡北島町鯛浜大西
〃	山口シゲコ様	板野郡松茂町長原一二三
香川	秋山　正清様	観音寺市柳町
〃	奥田　マス様	観音寺市八幡町
高知	河野　里美様	高知市瀬戸西町二―一七七
〃	藤原　晴敏様	高知市相生町七―二三
福岡	広田ヨシ子様	福岡市長浜二―四長浜ビル一二八号
佐賀	宮崎　トモ様	唐津市佐志南町三八八二
〃	山田　文子様	唐津市西城内四―十一
長崎	安達シツヨ様	佐世保市大野町六一―一八
〃	林　信之様	佐世保市東山町一〇―三九

熊本　大宮　誠子様　熊本市出水町国府一〇三九
〃　北村　権蔵様　熊本市中島町一一〇二
大分　得丸　茂夫様　別府市新別府六組
〃　石塚　文子様　大分市上野丘二―三―二七
宮崎　岩切　利平様　宮崎市折生迫二区
〃　杉田ヨシノ様　宮崎市下原町三三九―二一
鹿児島　村上　ノキ様　川内市隈之城町一六六五
〃　和田　芳久様　薩摩郡宮之城町田原九二九
沖縄　浦崎　ナエ様　羽地村字仲尾次四八二
〃　名嘉山全財様　那覇市松尾一九

寄付者芳名

（四七七名）

今期もまた左に掲げますとおり、多数の有志の方からの御寄付をいただきました。厚く御礼申上げます。

ここに載せました会員の方からは、この外に四十七年までの会費は全部いただいております。中には四十八、四十九年と先々までの分を前納下さっている方も多数ありますことを申添えます。

環礁を御覧下さってお悦びのお便りをいただいたり、寄付の御送付によって経済的の御協力をお考え下さる実情に接し、会長はじめ役員一同張り合いを感じ努力をつづけております。

（昭和46年11月から昭47年5月31日までに入金の分）

寄附額　芳名　（敬称略）

〃　ナウル第四高会殿
〃　竹浜　健蔵殿

篤志会員その他

五〇〇〇　高木　武雄殿
〃　藤平　直忠殿
四〇〇〇　相川　清殿
直会旅行者一同に菓子折一個ずつ
三〇〇〇　嘉村　栄殿
〃　金子　英郎殿
〃　十二　徳次殿
二〇〇〇　千葉　秀夫殿
〃　土屋　太郎殿
一五〇〇　三角　芳貞殿
一〇五〇　成宮芳三郎殿
一〇〇〇　井上　義夫殿
〃　高野　庄平殿
〃　福田　呉子殿

◇北海道

五〇〇〇　母　宮前ハツエ
二〇〇〇　父　沼山長一郎
一〇〇〇　弟　田畑　武雄
五〇〇　阿蘇みさを
〃　長女伊藤　フジ
〃　妻　白山光枝子
〃　妻　土屋トミエ
〃　原田　カツ

◇青森県

一五〇〇　妻　工藤　ハナ
〃　姉　伝福　ちゑ
一〇〇〇　妻　本堂　テフ
五〇〇　母　田中　ロク

◇岩手県

一〇〇〇　妻　金戸　賢一
〃　星川　クマ
五〇〇　菅原　ヨリ

◇宮城県

一〇〇〇　妻　大森きみ江
〃　妻　平形いせこ
〃　妻　松木　孝子
〃　妻　渡辺　雪子
五〇〇　兄　卯花要一郎
〃　母　佐藤　けん
〃　妻　菅井わくり
〃　新田富美子

◇秋田県

四〇〇〇　母　熊谷サダヨ
一〇〇〇　父　佐々木三郎
〃　兄　成田松一郎
六〇〇　小室舜司郎
五〇〇　姉　佐藤　敏子
〃　兄　関山富一郎
〃　兄　高橋　喜一
〃　母　時田　セキ
〃　妻　畠山　タカ

◇山形県

一五〇〇　妻　渡辺　ミノ
一〇〇〇　妻　赤塚　美正
五〇〇　妻　大泉　時子
〃　妻　大場美津子
〃　妻　丹野　アサ
〃　弟　森谷　利雄

◇福島県

一五〇〇　父　長谷川　深
一〇〇〇　妻　吉田　ハル
五〇〇　妻　石橋　節子
〃　姉　江尻　キヨ
〃　兄　坂本　吾郎
〃　母　堺　ヤキ
〃　妻　吉津みどり

◇新潟県

六〇〇〇　妻　高林　セキ
五〇〇〇　兄　今井　盛一
三五〇〇　妻　渋谷セキノ
〃　妻　藤田　ヨリ
二〇〇〇　兄　阿部　文吾
〃　青木　謹次
〃　父　山田　清
一五〇〇　兄　安中　久雄
〃　妻　小川すみ江
一〇〇〇　妻　佐藤　フジ
〃　深谷　偵治
〃　母　米田　ナヲ
五〇〇　姉　鮫島みさを
〃　父　石塚　辰寿
〃　父　高野　仙吉
〃　妻　山本　チイ

◇茨城県

一五〇〇　兄　鴻巣　千太
一〇〇〇　父　青柳　泰蔵
〃　父　飯塚　美雄
〃　妻　若狭あさ子
五〇〇　母　老海原あき
〃　父　遠峰　軍治
〃　母　松塚　みよ
〃　母　宮内　はつ

◇栃木県

二五〇〇　妻　猪瀬　ナカ
二〇〇〇　母　西倉　ヨシ
〃　父　増淵利三郎
一九〇〇　妻　大橋　サク
一五〇〇　父　大山　藤太
五〇〇　父　川島　勝
〃　母　神山　さく
〃　弟　菊地　彦亘
〃　兄　富士川金七

◇群馬県

五〇〇　妻　泉谷　スミ
〃　妻　珍田　光子
〃　妻　城田ミツエ
〃　父　滝沢謙次郎

◇埼玉県

六〇〇〇　妻　志村　マツ
三〇〇〇　父　幸島　敬資
二〇〇〇　妻　小谷中せい
一五〇〇　母　松岡ちよう
一〇〇〇　鯨井　久八
〃　妻　福島　レイ
五〇〇　浅野　チカ
〃　妹　大野とみ子
〃　兄　小暮　長一
〃　弟　秋山　正行
〃　妻　菅井せい子
〃　妻　長谷部なを

◇千葉県

二五〇〇　妻　星野千重子
二〇〇〇　妹　石川きみ子
〃　妻　浄永　孝子
一五〇〇　母　鈴木　はつ
一〇〇〇　妻　岩佐とみ子
〃　妻　佐藤　静江
〃　妻　佐野　和子
〃　父　中山　信道
〃　妻　広原　チヨ
〃　弟　宮本　豊吉
五〇〇　弟　相川　孝夫
〃　母　大木　まつ
〃　母　小路川きみ
〃　妹　芝崎　俊子
〃　妻　鈴木　うめ
〃　妻　高安　コト
〃　妻　谷沢　英子
〃　妻　長沢　その
〃　宮崎富兵衛

◇東京都

一五〇〇〇　母　水野　はな
一〇〇〇〇　母　橋口キクエ
〃　父　村上　義一
七五〇〇　母　木村　ちよ
〃　妻　問々田やす
五〇〇〇　妻　荒井　福栄
〃　妻　佐竹　エス
〃　妻　国松ふみ江
〃　妻　小泉　文江
〃　母　島村　婦久

四五〇〇　兄　内海　軍三
〃　兄　昼間　楽平
三〇〇〇　兄　高橋　鎮夫
〃　妹　宇田川ひさ
二五〇〇　弟　柚木　欣司
二二五〇　母　岡本　リヨ
二〇〇〇　兄　井上　賀雄
〃　妻　岩浪きよ子
〃　母　笠原　きく
〃　小畑さと子
〃　菅沼　清子
〃　菅原　妙照
〃　母　助川与富子
〃　妻　芳賀タツエ
〃　母　吉田　いそ
一七五〇　弟　栗原　利雄
一六〇〇　妻　中村喜久代
一五〇〇　長女鈴木　裕子
〃　川本　十松
〃　中村みさを
〃　姉　緑川　まき
〃　妻　若松　モト
一〇〇〇　父五十嵐孝治郎
〃　母　石谷　トシ
〃　母　内田　とよ
〃　兄　荻島　佐吉
〃　母　加藤きくや
〃　母　木間　マツ
〃　兄　小島　章
〃　兄　斉藤耕太郎
〃　兄　浜口　博
〃　弟　土岐　達雄
〃　妹　小山キミ子
〃　妻　野口　ウラ
〃　母　増山　キミ
〃　篤　名
〃　母　吉田やよい
〃　妻　六軒つる子
五〇〇　母　伊藤　ハナ
〃　兄　飯島浩一老
〃　糸川　カネ
〃　母　江間イクヨ
〃　母　小泉　タケ
〃　弟　佐々田良二
〃　父　鈴木　清倉
〃　母　鈴木　シズ
〃　妻　菅谷きよ子
〃　父　手塚　正美
〃　鳥居ミサヲ
〃　父　中島三三郎
〃　妻　中田　わか
〃　母　長尾　ふさ
〃　兄　並木　多重
〃　妻　原　富子
〃　母　福原　キチ
〃　兄　松井　直一
〃　母　宮地　つや
〃　望月　一雄
二八〇　母　吉田　せい
〃　長男広田　時親

◇神奈川県

一〇〇〇〇　弟　岡野　正文
二五〇〇　母　柳田　リン
二〇〇〇　姉　沖立　キヨ
一五〇〇　兄　岩瀬　石松
〃　母　斉藤　リウ
〃　妻　中村　サダ
〃　妻　三村ともよ
一一〇〇　妻　落合　てふ
一〇〇〇　遠藤　芳子
〃　妻　木俣ミサヲ
〃　妻　佐藤　貞子
五〇〇　妻　伊沢　ヤス
〃　母　飯田　ちか
〃　母　石渡　ムメ
〃　妻　稲村　かつ
〃　弟　内山　秀吉
〃　妻　栗田千代子
〃　母　鈴木　リン
〃　妻　高木スズエ
〃　妻　田中トメノ
〃　姉　平松　菊枝

◇山梨県

四〇〇〇　父　黒川　孝平
一〇〇〇　妻　望月とよ子
五〇〇　父　志田平八郎
〃　兄　岡部　儀一
〃　妻　星野うま子

◇静岡県

一〇三五〇　妻　大高　吉郎
六〇〇〇　妻　土屋まさ子
三五〇〇　妻　飯田たつ子
二五〇〇　妻　服部くにゑ
二〇〇〇　父　勝又　良蔵
一五〇〇　父　赤堀弥三郎
〃　妻　大畑はるゑ
〃　母　清水　ひさ
一〇〇〇　妻　大塚　かね
〃　母　畑中美佐雄
〃　父　深見　助一
〃　母　米倉　ぬい
五〇〇　妻　伊藤とよ子
〃　妻　石川　けい
〃　父　石橋　源吾
〃　甥　江藤　高雄
〃　母　草川　なつ
〃　母　曽根　エイ
〃　兄　田中　正美
〃　母　高山　たき
〃　母　中村　はん
〃　父　中村　清一
〃　弟　野崎　豊秋
〃　松下　竜二
〃　母　前田　かね
〃　妻　三浦　染

◇富山県

三〇〇〇　栅橋　昭二
二〇〇〇　村梶　光栄
〃　妻　本多喜久江
一五〇〇　妻　松田ふじゑ
〃　母　吉田　よく
五〇〇　姉　柴田外美子
〃　母　寺島　きよ
〃　妻　西本　きよ

◇福井県

四〇〇〇　弟　田賀佐太郎
一五〇〇　妻　梅田　清子
〃　妻　鳥羽　春枝
〃　兄　水谷　義雄
一〇〇〇　妻　青木みねを
〃　柳沢　清信
五〇〇　父　堂東　秀

◇石川県

二〇〇〇　二女横浜　福居
一五〇〇　長男永井　武弘
一〇〇〇　姉　大島　かの
〃　母　佐々木久子
〃　妻　寺西ときわ
〃　妹　吉光　澄子

◇長野県

二五〇〇　妻高見沢およう
一五〇〇　姉　竹川　房江
〃　兄　宮入　貞夫
一〇〇〇　妻　岡島みね子
〃　兄　勝野仁一郎
〃　母　末松すみ江
〃　父　中村　克巳
五〇〇　妹　牛山　光子
〃　妻　鎌倉さかよ
〃　母　滝沢　てる
〃　妹　和木かね子

◇愛知県

二〇〇〇　妻　川越　コウ
一五〇〇　兄　川村　正一
〃　母小山内小美賀
〃　兄　中村国太郎
〃　妻　山田　あき
一〇〇〇　兄　伊藤　一二
五〇〇　母　池山　くわ
〃　喜多登喜子
〃　山本彦右衛門

◇岐阜県

二〇〇〇　妻　鳥本みさを
一五〇〇　母　寺沢喜美代
一〇〇〇　母　渡辺　きさ

◇三重県

五〇〇　父　荒木　寅松

◇滋賀県

五〇〇　母　田中　ノブ

◇京都府

二〇〇〇　兄　高津三代治
一五〇〇　母　柴田　さく
一〇〇〇　妻　稲積　や江
〃　母　小林　サト
〃　妻　中根　杉子
〃　妻　長谷川田鶴
〃　妻　上村　増枝
〃　妻　八木　きよ
五〇〇　母　古川　たけ

◇大阪府

一〇〇〇　父　栗巣弥市郎
〃　妻　堀家かつ江
〃　母　安井　文子
五〇〇　伊藤　登

◇兵庫県

三五〇〇　父　藤本　亀吉
三〇〇〇　父　瀬川　英治
二〇〇〇　母　清水つちゑ
〃　妻　友枝カオリ
一五〇〇　母　林　いち
一〇〇〇　妻　沢田　寿子
〃　鶴長　僚子
五〇〇　母　枝光　たい

◇和歌山県

一〇〇〇　妻　谷口　たき
〃　妻　山中　フジ

◇鳥取県

一五〇〇　妹　杉川　及江
一〇〇〇　母　水野　せつ
五〇〇　父　門脇　財重
〃　母　田中はつの

◇島根県

二〇〇〇　妻　木村　久子
一五〇〇　父　下地　政市
一〇〇〇　妻　松下　綾子

◇岡山県
一五〇〇　母　岡　佐免
一一五〇　妻　宇山　アサ
五〇〇　妻　中島　清子
◇広島県
二五〇〇　妻　植田　操
二三〇〇　妻　浦手　ハル
二〇〇〇　妻　原　シヅエ
一五〇〇　母　久保サクノ
一〇〇〇　妻　小林アヤ子
〃　妻　松木タカミ
五〇〇　兄　石田　史郎
〃　妻　川西シズコ
〃　妻　田口　マサ
〃　妻　大年ミユキ
〃　妻　寺内ヤチヨ
〃　母　藤本カメヨ
◇山口県
三二五〇　妻　内富みつよ
一五〇〇　妻　嶋田　チヨ
〃　母　原田　ミト
一〇〇〇　妻　児玉　富子
〃　妻　福谷　幸子
◇徳島県
一五〇〇　妻　大寺　綾子
五〇〇　父　高橋　清子
〃　母　豊田　民蔵
〃　母　西　ハナ
〃　母　野田　好美
〃　兄　峯野　英男
〃　妻　山口シゲコ
◇香川県
五〇〇〇　長男秋山　正清
〃　母　田口ヤスエ
三〇〇〇　母　奥田　マス
一〇〇〇　二男秋山　正興
〃　妻　石田　藤美
〃　母　富家　ツ子
〃　母　富田トシ子
〃　父　久森　俊一
五〇〇　増井　行雄

◇愛媛県
〃　妻　松原ユキエ
四〇〇〇　弟　福田　忠幸
二五〇〇　母　山岡シゲミ
二〇〇〇　妻　清水　朝美
一五〇〇　妻　伊藤　梅子
〃　妻　渡部　とみ
一〇〇〇　父　久枝　九平
〃　母　三好　勝子
五〇〇　母　井原トメヨ
〃　兄　魚田　清明
〃　妻　小西アキヨ
〃　父　新谷　房男
〃　母　宅見　クマ
〃　母　西　サクノ
〃　妻　馬場ミネ子
〃　山本　峯子
〃　父山之内源三郎
〃　兄　渡辺　義雄
◇高知県
一〇〇〇　兄　中沢　公
〃　父　馬場　福義
五〇〇　母　倉本　朝衛
〃　妻　田中　百合
〃　妻　中越キミエ
〃　母　山脇　熊野
◇福岡県
五〇〇〇　妻　広田ヨシ子
四五〇〇　弟　西原　康雄
三〇〇〇　母　徳王　好子
二五〇〇　母　小林オカツ
一六〇〇　兄　樗木孝二郎
一五〇〇　妻　太田　菊江
一〇〇〇　妻　一瀬クモエ
〃　父　岩崎関次郎
〃　母　家迫　ソヨ
〃　妻　甲斐　光子
〃　妻　近藤シズエ
〃　妻　柴田ヤエ子
五〇〇　兄　一木　貞利
〃　母　池末　ツマ

〃　母　緒方ミサヲ
〃　母　片山　キク
〃　母　倉智　トモ
〃　兄　佐保　明
〃　父　杉山　柳平
〃　妻　秦　サカエ
〃　父　初瀬　隆乗
〃　三男三坂　茂
〃　母　峯　シマ
〃　妻　森　キヨ子
〃　父　安岡藤五郎
◇佐賀県
二〇〇〇　妻　井手ツギヨ
一五〇〇　妻　石田　トシ
〃　父　北島助九郎
〃　母　宮崎　トモ
一〇〇〇　兄　白浜　助蔵
〃　兄　手島　辰巳
〃　妻　山田　文子
五〇〇　母　金子　セノ
〃　母　坂本　トセ
〃　妻　宮崎　ツヨ
◇長崎県
二五〇〇　妻　松尾　フサ
一五〇〇　妻　安達シツヨ
〃　母　田口　クニ
〃　妻　原田　トヨ
〃　妻　平田　利子
〃　妹　前原すみ子
〃　妹　重永てる子
七五〇　妻　前田　フサ
五〇〇　妻　林　文枝
〃　母　大石　クマ
〃　母　小林　ミツ
〃　妻　鹿田ミサカ
〃　妻　田村サヨ子
〃　妻　福田　音和
◇熊本県
三〇〇〇　妻　植村　芳恵
一五〇〇　妻　今村　コメ
〃　妻　片山喜久枝

〃　妻　釜賀キクエ
〃　村上佳寿子
一〇〇〇　妻　大宮　誠子
〃　兄　北村　権蔵
〃　妻　塚野ヨシ子
五〇〇　父　伊藤鉄太郎
〃　妻　内田サオリ
〃　長女篠原　弘子
◇大分県
一〇〇〇　母　石塚　文子
五〇〇　兄　衛藤　金喜
〃　兄　得丸　茂夫
◇宮崎県
一〇〇〇　妻　池田　トミ
〃　母　土工アグリ
〃　母　野別　ヒナ
五〇〇　父　木許　国蔵
〃　妻　児玉　チン
〃　母　杉田ヨシノ
〃　妻　園田エイ子
〃　父　西　敬二
〃　父　西村　三吉
〃　妻　山口マサ子
◇鹿児島県
二〇〇〇　妻　丹村　静枝
一五〇〇　長男和田　芳久
一〇〇〇　妻　神川　カツ
〃　妻　染川トミヨ
〃　長男丹村　修
〃　父　塗木覚兵衛
五〇〇　妻　川畑ツルエ
〃　父　田口　清助
〃　父　出花　池栄
〃　妻　徳重ミツネ
〃　姉　松下ツギノ
〃　妻　森　テル子
〃　妻　山下　キサ
一〇〇　父　内山　栄次
◇沖縄県
五三六　父　浦崎　ナエ
〃　名嘉山全財
二五二　父　金城　保二

明年二月六日の直会旅行予定

予定を申し上げる前に、今年の旅行も御申込者多く員数の関係上お引受けできなかった方々には深くお詫び申し上げます。

創立後六、七年はただ馬車馬のように戦記、現地の調査、収骨、慰霊、建碑等に邁進しましたが三、四年前少し旅行も考えてほしい御希望が出たことから四十五年修善寺温泉を皮切りに始まりました。大変好評で御希望が増え、遂に今年はお断りする方が出来るようになりました。観光というより、共通の話題をもつ者同志の親睦が魅力のようです。温泉地は修善寺温泉だけであった。一番寒いときである、来年は火曜日であるからすいているだろうなどの理由から担当の役員方は伊豆半島の温泉地を考えられました。早目に宿に着いて、ゆっくり温泉を楽しみ、ご一緒の夕食に話を咲かせようというのです。翌朝ゆっくり二、三の観光をして夕方近くお別れするという概略です。先日来佐藤、佐竹両常任幹事を中心に、旅行ベテランの岡野、末広さん腕によりをかけておられる様子です。来年も充分ご満足いただけると思います。ご希望多ければバス二台にします。詳細は次号でお知せいたしますが、お申込みは今からでも先着順におうけします。

✽　✽　✽

馬場直人様からの第二信

（47・6・10受）

拝　啓

先日は突然なお願いにも拘りませず、早速環礁第一集及びマーシャル方面遺族会名簿お送り頂き、厚く御礼申し上げます。

終戦後二十七年間、一日も忘れられない思い出のクェゼリンです。さぞ遺族の名簿をお作りになられる迄の困難は大変な御苦労でございましたでしょう。厚く御礼申し上げます。

さてこの写真は電波物理研究所（環礁第9号クェゼリン環礁警備日誌八月十日を参照）の技官が明治節に撮って下さったものです。

遺族の方に差上げ度く思っていましたが、何分ご住所が分りませず、其の内に記憶も薄れ、氏名を失念致すやら致しまして、今日に至りました。

お送り頂きました遺族会名簿を毎夜遅くまで拝見いたし、幾分か氏名を思い出しましたので、忘れない内にと氏名を書きとめました

林中尉、戸田内中尉、岡野中尉は学徒動員で召集せられました士官らしく、三人共大変仲良く、士官室に食事にお出でになっていましたのを記憶しています。

私は昭和十七年九月頃（だったと思いますが）より十八年十二月初旬まで主計科の庶務と給与を担当致しまして昼間は庶務、夜は給与の計算と毎日忙がしい日々を送りました。当時は司令は鈴木忠良中佐で副長は斉藤明大尉ではなかったかと思います？

A写真前列より二列目が大体准士官以上（襟章を見て下さい）、司令の右隣が副長、司令はこの時は和田純久大佐です。

A写真の司令の右が副長、その隣三人が林中尉、戸田内中尉、岡野中尉（予備士官）だったと思います。お名前は写真とは反対かも知れませんが。司令の左が通信長（お名前を失念致しましたが特務中尉の方）一人置いて白浜少尉、一人置いて大野兵曹長？（御遺族佐世保）一人置いて私の上司、庶務主任（お名前を失念致しましたが主計兵曹長でした）

A写真後列二列目右端が私の後任に来られて戦死された久保田主計兵曹長です（高知県の久保田敬文氏と思いますが）

熊本県の城勘一さんは、矢張り主計科に居られた城さんではないかと思います。

A・B写真は士官は二度写っていますが、兵は当直交替の為全員一度に写れませず二度になっています。B写真後列、右側の二人は電波研究所の方です。

以上とりとめのない事許り書き連ねましたが、何分28年前の記憶ですので、確信がもてません。

来年二月六日は是非参拝させていただくため上京いたす積りでございます。

昨年六月二十二日の閣議の決定によって、旧金鵄勲章一時賜金を受けた者（昭和十五年四月二十九日付けで金鵄勲章を授与されたことにより一時金として賜金国庫債券を支給された者）に対して、内閣総理大臣から銀杯が贈られることになりました。これはおおむね昭和四十八年九月三十日まで受け付けることになっています。昭和三十八年四月二日以降本人（金鵄勲章を授与された方）が死亡した場合は配偶者や両親、子が受けることができます。これにあてはまると思はれる方がありましたら、本部にお知らせ下さい。

○特にクェゼリン

第六通信隊の御遺族え

本号表紙の写真は、同島玉砕一ヶ月半前まで六通に勤務の主計科の方です。お話しによると、戦争最中であり、総員を一度に撮ることができないため半数ずつ撮影、従って二枚A・Bにわかれています。表紙に使ったのはAの方です。八ッ切に伸すと顔がはっきりしますので、ご希望の方には八ッ切、A・Bを組にし百五十円（送料別）でおわけします。本部宛お申込み下さい。

本　部
郵便番号一五四
東京都世田谷区野沢
三丁目十一番三号
マーシャル方面遺族会
電話（東京）四三一三六四番

事務局だより

○役員人事の異動について

十頁本年度定期総会の報告で記載しましたとおり、橋口常任幹事は長い間会計担当をお勤め下さいましたので、本人のお申出もあり幹事井上賀雄殿と相互交代をお願いしました。橋口前常任幹事には、長期に亘り、細かい会計事務を御担当下さいました御苦労に対し深い感謝の意を表しますと同時に、井上新常任幹事には御多忙中ご迷惑とは存じますが、本件御担当下さいますようお願いいたします。

○靖国神社みたま祭

毎年のことですが、今年もまた七月十三日から十六日まで、靖国神社社頭に「マーシャル遺族会」と墨書で大書した大型献灯が毎夜ともされます。会の続く限り、本会の名をここにとどめ、英霊各位のお悦びを得つづけたいものと存じます。

○会費納入励行のお願い

本誌は従来の行がかり上、かなり多方面の方にお送りしていますので会費納入のことについて、屢々誌上に掲載することは望ましくありません。しかし一方副碑製作のため多額の費用を要することと又物価上昇と郵送料の値上げが直接影響するに反し、会費収入は決算報告（十一頁）にもありますとおり次年度への繰越金が漸減いたしますことは憂うべき状況であります。会費値上げの御提案は総会の度毎にいただいておりますが、御家庭のご事情必ずしも安心を許さない方もあり、むしろこのような方々にお配りいたしたい場合もあって、本部役員の工夫と努力によって窮状を切抜けたい考えから、会費の値上げを控え、据置いております。なお具体的に申し上げますと、四十六年五月十五日現在、四十六年度の会費納入者約一、二〇〇人に対し、本年五月十五日現在、四十七年度の会費をお送り下さったのは六四五人しかありません。この状況がつづきますと、会運営の停止につながる大事な問題でございます。従って四十七年度会費未納の方は至急お送り下さいますようお願いします。このような実情ですので出来ますならば会員相互扶助の思し召しをもって、会費に若干の寄附を加えて下さいますようお願い致します。

副碑製作のために現地慰霊碑維持基金まで手をつけなければならないという破目におちいらぬようこの際絶大なる御協力下さいますようお願い致します。

○旧軍人・軍属の残務について

終戦まで旧陸軍省、旧海軍省の仕事であった旧軍人、軍属についての仕事は、戦後二十七年を経た今日なお厚生省内の援護局が中心となり、地方は各都道府県庁の民生部（名称は民生労働部、厚生部、衛生民生部、県民生活部、社会部等といろいろ異なりますが）が取扱っています。これらの名称、所在地等は本部ですべて判るように整備してありますので、御遠慮なくお問い合せ下さい。

○旧金鵄勲章一時賜金受給者に対する銀杯授与について